

聖學自在

中

9
99
2



門 9
號 9
卷 2



學月在中

目錄

あふふふふ

佐人の友

柳氏志剛

世の智恵立

四智

ねねねね

後義信

異春

早合兵子春込

晩學片紙代字同

古語お似しり

目先はあき人

君子の言

才力世功貴ぶ

誓

昭久

儒学多見

神生齒の

物代崇

妖怪の呪

古易波相法

日記の世用

元寇の目録

香子不始人

儒学記

目録終

三男と毒物

忠愛信疑

神木と伐の

細事と

煙草と

粧政城

古今の風

儒志乃辨

聖學日在卷序

新井白樹 著

○あふふ記

我人曰あふふ記と云ふは、
子孫多くと云ふ事と第一なるべし。又月記と
無業一人名も、
林色美を何と云ふは、
今世の世に於て何と云ふ事、
く世を老の世と云ふは、
らぶくも、

一 記親しい友人あるに駒じりふらふ雲をたふ
あらけし秋風の寒ふしむはた何とぞ人びり思ふ
おひれ露をのける主の秋の時ぬれ板屋ふた
はる黄葉は老の秋ぞめ病ふいささええこれ
の秋まらるるふあましくやあましく文のふ
きひぬれ秋のちるふもくそぬれ葉は陽和のふ
浮ひ人ふもぬれぬれあふれぬれあふれぬれ
はるもあふれぬれ秋の陰氣ぬれぬれぬれぬれ
うらふぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれ
故に秋をぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれ

○ 又合点早看込

人々に心を教訓するを又合点早看込を席わて感
服するものも世に人相ふあて中の人々事と違て
はるあふれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれ
てぬれ感するものも世に人相ふあて中の人々事と違て
かゝるあふれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれ
貴きものも天より交りて人相ふあて中の人々事と違て
ふれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれ
吾のふれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれ
かゝるあふれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれ

人世間のゆかりのたゞのふたふた

○柳氏勸戒

柳氏を子牙と戒て曰凡人民を壊るに非ざる先祖
と厚く家と喪を失ふたふたのあり其一二
あてと求むと又業難者事とて食事も日
好く苟くもたふたのまふたの成るや
恤へ其一二傷めと
理り惜く邪をあらわす別れも
盲からせふ世と評判し道理もつての解頤を
無事知れをせふて人々を我を待たせふ

柳氏は後者八世を厭ひ是を痛ひに非ぬ使ふ者
堂々たる就後と樂に取らるる一白
らるる告るを聞て是を痛む人お
て福何とぞ柳氏年小能解
事と柳氏と刻とて
貴人柳氏に非る所貴人より其四
後進と酒を嗜むと風流を好むと
乃勸は依たり事とて其五つた好官
の急用柳氏方内とて近頃とて
とも人好むとみれば仕換ふ

柳氏

そは乃ち重き志と解めらるる今代はあつて
 方の程と——ぬ物難はれ其具をばせりは後百代
 乃末及も武叙の儼子呆郎の恥辱は消々の事
 小高時武叙の心我は天啓智恵なるものなり
 ありけり今彼を根と想像し折後と後と盲妬小恐
 とあ世も武叙が同類の多きことなりたてられ

○目先の疾き人

世も目先の疾き教のたふ人といふ事け難ひと身がばはる
 俊才なりとも又邪智の舞才なるものなり
 本世も何来氏といふものなりを朋友日取相集りて傳

智の命をさるる者例の友うちあ世はれを申しあ
 大に偶ふあはれ細くして後——今後其人彼目先の
 るやまきと何事と後なり——ぬ教の耳と傾け
 掛合何なりと初合はれ方と教人なりといひ男ありと
 家代も人代をさるる事なりといひけりて是も
 るなりとめめはれはるる事なりと物かすなりと
 坐小きてあつてお後とあひるなりといひてあつて
 ういといひ世上通用の世授用事なりと述べてあつて
 事なりとあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 國土おあつてあつてあつてあつてあつてあつて

氣を毒な妨あるを傷ひ終る所の事なり
おそむかば其の徒に大敵貴に出入するの事忌避せん
然るに傷たふをばしむる事と雖も文人として其を
非難言一之傷るを教何なりするやうに

○君子の言

東漢の士の人中村某は予に語て曰我々を東漢人の徳を
非難する事とがこれ其まはつべきものと云ふ人れ他を
美譽するものと語をたれは吾事と云て他何の事
もなかりと予曰君子の言なりこれ吾事のみ此の
徳を信信た抵人の能を妬る人賢と拒むは念に

小胸中其様は念いしと思はぬがそれ先山
故人の言を聞ふは吾事と云はれも肯ん其人の
予を流し違ひなり其ののりから其は学たふ
不及書と懐もいふ切なり

○世の出来

小室から人々二重から其の事れも胸中其様を交納
て決断すまき其をたのむ何れも其をすなりとの
と氣だういふなり其れ明なるのみと念
とて其れも其れ人々吾事一人なりぬ妨あるは
る是と断り其事といふみずるなり其れ其土と食ふ

て余はなりといふもたは事なかりといふも余
殖りのおおききいれ貴乃と云ふ食なり一何と云
命なりいれきと云ふも余なりといふも余
事は一老人の食なり余なりといふも余
むも余なりといふも余なりといふも余
後高きなりといふも余なりといふも余
早一世上高きなりといふも余なりといふも余
銀と云ふ一物なり余なりといふも余
年くふ失り余なりといふも余
細く云ふ一物なり余なりといふも余

○才力世功と貴

韓退之湖州刺史の序に後者と同様の一は溪中水纏栗を
人々食ふなりといふも一は退之文なり後者は沈め一は
纏栗を食ふは溪中水纏栗を食ふなりといふも余
は余なりといふも余なりといふも余
然るに一は魚なり人々食ふなりといふも余
人々食ふなりといふも余なりといふも余
氏は建一は韓纏乃文なり功韓子信なりと徐氏

其修より久しき人なりや韓子の言はば人をして要する
次文惠の功は大なりといへども其言を要する人々
実功実功と雖も事と社稷の事なり

○後義僧

世に後義は後賢にたずくを付て佛後おもへざるを根を
是難なる事といひて惡意の心をもちて惡事を進ずる人の
事なり

秋迦といはれし世ふかゝる人々を惡するの心

は秋迦といはれし世ふかゝる人々を惡するの心
方便なりといふ遠くは秋迦の心は也斯も秋迦の心なり

己の心は佛の心と釋迦といはれし佛の心と釋迦といはれし佛の心
が世ふかゝる人々を惡するの心と釋迦といはれし佛の心
乃譚龍と高代後賢僧は佛中の傑出なりと雖も其心
予楞嚴經と看す形は佛なりて肉食妻帯する者と雖も
魔王魔民魔女なりといふ佛曰我威靈は未だ中は此の如く
世間小僧は皆に奸欺なりて其心は佛の心と雖も其心
と雖も其心は佛の心と雖も其心は佛の心と雖も其心
と雖も其心は佛の心と雖も其心は佛の心と雖も其心

○要言

佛の心は早暈なりといふを要言といふ下巻集に高

禪那の
 字ハ文
 比西京
 比佐岐
 比と川

傷也と信じて信じて経曰我威度未及の中賊人我假衣
 服禪那如來遠釋業皆言佛は亦非が家具戒比丘
 為小宗道由是疑供を乞ふ生墮を同獄とてそ彼
 魔氏盜賊乃身として佛の衣を著し解て佛長衣を來
 乃乞を賣のふし様を佛業と違ひて後なりといふ魔氏
 を賣といふ之賊の字は賤く買て貴く賣て得る世俗
 小の字はたが物なり欺きて乞ふと賣付るは又阿難
 曰大盜賊と欺るるもの凡そ賣を割て梅檀の形とす
 氣味求るるものも是とて乞ふは佛法より世俗
 君民と欺る金銀を採りて堅固佛の事とて乞ふは世俗

してて乃三面を告めし信た人々を驚かしといひおき

○異處

或曰佛後の衣はたはたの秋衣は母の服後と破正て出る
 ともたはたはたの秋衣の衣といひて衣人々を驚かしといひおき
 天竺はたが衣道の外装作にあやひき小僧の中衣も
 も楚より祖陸終といふ者もききりといふ腹折割て是
 とき儒学も多し事を疑ふ強ふ小僧の苦役を文帝
 といふ宋の屈雍は妻王氏男子を生ずる腹中割て生る數日乃
 同小創令母母又甚人云彼已死背折て出る生簡狀は
 胸割て契する老婦人左の腹に隔て生秋衣は衣後と隔

て又孝親来^きてふ^を民^し服^ふり^を子^こを^を母^{はは}子^こと^をふ^をサ^を定^{さだ}孝^を
宣^{のたま}う^を妻^を家^をの^を産^を乃^を中^をも^を思^をて^を孝^を又^を宋^をの^を武^を市^を村^を楊^を詠^を
妻^を乃^を股^をの中^をも^を又^を宋^をの^を菊^を田^を乃^を市^を人^をの^を妻^を男^を子^をと^を産^を股^を脾^を
乃^を同^を乃^を中^をも^を思^をの^を産^を母^をれ^を助^を下^をふ^を腹^を中^を其^を中^を
思^をて^を孝^を乃^をれ^をと^を思^をの^を産^を世^を人^を乃^を故^をに^を宿^を秋^を実^をの^を事^を
の^を産^を乃^をふ^を

○胎之

郭植との言の母胎内小止事二月天所出也
 月して生れ朱慈昌月十六日小生事宋景濂氏二平也
 月して生れ朱慈昌月十六日小生事宋景濂氏二平也

○ 双生多見

日中紀景初紀小大難やまといひる小難やまといひる同胞ありてさうせい幾いくさなりあ
 大難やまといひるは小難やまといひるより中なる也双生の事ふたごは五難ごなん相あひ
 もとより小難やまといひる多見くわんる考かんる中ちゅう漢土かんとふてい小魏くわい北延興きたんの中
 小秀容郡しゅうようぐんの婦人ふじん一壽いず其その男子なんしを考かんるも考かんる毎まい小く
 此こゝとてい世考いる男子なんしを考かんるも考かんる又また趙魏しやうゑい陽やう民みん
 一壽いず小男子なんしを考かんるも考かんる又また明めいの天順てんじゆん中ちゅう民みんの事こと
 考かんる小男子なんしを考かんるも考かんる又また天祐てんけう中ちゅう小大おほい名なのい一壽いず民みん
 考かんる一壽いず小男子なんしを考かんるも考かんる又また事こと小成せう金きん作さく席せきりわかれ
 七しち二月にがつ小考かんる又また今こんの清せい朝てう康熙こうせい中ちゅう欽きん廉れんの民みん一壽いず民みん

一産三
子賜物
是為法
者必史
所載不
少

又淺川縣の氏一產ふち子一產二男を産み
年ふ不給なり

○三男成産を賜指

多城天皇大同二年二月辛卯相摸守吉野郡抄部國右
か女一產三男賜指二百米一米の計目の事

○初生齒を生

子生齒する齒生るるを乳母は授けずも既多文社黄髮
見齒する筈小田見齒亦壽徴と見えてやまふ抄部
初生齒の儀は後文より事を見ても
世に傳ふる事なり

傳事なり齒の生る年を乳母は授けずも既多文社黄髮
見齒する筈小田見齒亦壽徴と見えてやまふ抄部
初生齒の儀は後文より事を見ても
世に傳ふる事なり

○三男成産を賜指

多城天皇大同二年二月辛卯相摸守吉野郡抄部國右
か女一產三男賜指二百米一米の計目の事

と開く示と性理字義乃事のこ記に母教不補いあり
或る信て事記す只拙と志のし花咲か東漢史
編の方士傳をきて左の事と載は怪れ事記との類に
人の陋見を記し一君侯の妖怪れなる眩惑の言は
已に不記れんとて不記の事と感する也左傳莊十年申
子日人所忌其氣餘以所之妖由人興也と云怪れ
怪を記すと餘は是れいふも怪れなりと云
いふも是れ是れ是れ不記の事と決する氣はあり
進退は来するなりと云氣を虚示し乃氣を問ふ事
て怪なり怪なりと云性理字義曰記般の鬼作乃

狂なるの言なりと云人にて盡くすは盡く盡くせざ
其の盡くし怪なりと云のこし程子は乃官廨小妖
多し起て曰鬼教を怪と程子母の曰鬼とありと云
人まて曰鬼教を怪と云母曰熱なりと云後いふ
いふも怪なりと云いふも怪なりと云いふも怪なり
怪なりと云いふも怪なりと云いふも怪なりと云
敬と石晋と云いふも怪なりと云いふも怪なりと云
其ましむる石晋と云いふも怪なりと云いふも怪なり
て教なりと云いふも怪なりと云いふも怪なりと云
せは怪なりと云いふも怪なりと云いふも怪なりと云

僕もつて石晋より見事しきものも怪物ぬきび見
て中も金より又二程金書小哉と或は水とて時を妻
にやまひて水は堅氷くはるなりと云ふ死とて道金
寺にさるふりて佛事とて時を忽ちとて押さふ枝落
水に歸れて死する事との同く思て信に猶ふあう
とてて漁人妻と名流の中お救ひなりとて送りし
を妻と死又思ひの切なりとゆへに愛仲ふ感するも
柳柳
代破編み哉と妻をくはるあり金銀と座の中お死
せしれ時を妻ふひとてとてひさしく忘れぬ
は入り先とて病なり死する事なりとて妻家よ

ちて愛仲ふ妻はるをさるる死ふなりとて妻家よ
壁の中ふ車の上を妻をさるる死果して死とてさる
ふりて死するものなりとて死ふ事は病なりとて東
より外風俗通抱けたりとて足たる法助が妻は白養
大主親ひさるるも教百ほけらふ二事なりとて
ひさるる事なりとて死るるを魔魅なりとて魔魅所とて
相好家推押字現婆の影ひ顔とて魔魅金銀とて採取
とて執する名目なりとて魔魅の事なりとてさるる
悔ひなりとてさるる

○少人細事とて

[illegible]

て物ふ惑るるものぞ 又字様もするふも生ぬる純
根より義氣のくたのちのちも此の如き人をも

○古易館相法

世少相と経との多 古易と相と荀子に非相篇と又
魏曹子建の非相篇とて云々を晒しとて何故と今
やまた傳ふ莫教必敗事此を人固笑と果し毎
意者といふ宋光緒の死と是と宋の事此を人固笑と果し毎
殆の表と又強信ふ子路侃々如々孔子曰如由也其
死然との果しと南朝の乱と魏の事又孟子曰進むと
疾志は出くる急なり又曰ふ不ぬするもの眸子も亦

はあ 眸子を過ぐかとも事不能と見ても目ん
此表致乃云わ眼を告る事能とかくともいふ
聖賢の人と相するは今日平考れは状ふも強信ふ人
焉應哉の事なりと終て工すす今世と相書多
予是と看し其文素皆明文の作なりとの明人の仍作
とと西相の海花つるも明の事なりと斯もる下一應
柳庄達磨神相といふ相書も名をたかく聞ゆとも
皆信ふ仍信ふは是非不秋迦仏の相と述又述は実相
也是相といふ秋十思の相を述す外傳書ふも相と況
事多し多し今の相書ハ仙書より修め附するなりたの

○大食するも片下相ふして多^い 田舎の漁獲の徒も

下残るも同じ 西豪のくもて大食するものゝ多^い

先^{さき}不^ふ義^ぎ先^{さき}祖^その家^{いへ}毒^{どく}と威^い換^かと又^{また}維^い命^{めい}なり

○あゝ熱^{あつ}物^{ぶつ}と好^{この}て食^くするも下^{した}祖^その家^{いへ}毒^{どく}

○食^く事^じするも肩^{かた}残^{のこ}味^{あじ}縮^{ちぢ}室^{むろ}首^{くび}の^の片^{かた}多^い

○好^{この}て睡^ねものゝと惡^{わる}純^{じゆん}なり但^{ただ} 毒^{どく}男^{おとこ}女^{めづ}を七八^{しちはち}前後^{ぜんご}

と種^{しゆ}の^の片^{かた}は例^{れい}より多^い

○世^よの^の場^ばの^の目^めと知^しい人^{ひと}は知^しる人^{ひと}は作^{つく}強^{かぢ}すれ

の^の法^{はふ}惡^{わる}毒^{どく}多^い

○下^げ姓^{せい}乃^{なり}一寸^{いちじゆん}戸^こといふ^{いふ}種^{しゆ}は人^{ひと}も余^あ驗^{けん}を初^{はつ}なり

種^{しゆ}の^の片^{かた}は知^しる人^{ひと}は知^しる人^{ひと}は作^{つく}強^{かぢ}すれ

と教^{くわう}するも人^{ひと}は知^しる人^{ひと}は知^しる人^{ひと}は作^{つく}強^{かぢ}すれ

の^の片^{かた}

○煙^{えん}の^の片^{かた}は知^しる人^{ひと}は知^しる人^{ひと}は作^{つく}強^{かぢ}すれ

白^{はく}ひての^の片^{かた}は知^しる人^{ひと}は知^しる人^{ひと}は作^{つく}強^{かぢ}すれ

かゝる^かも^もき^きみ^みなり^{なり}も^もき^きみ^みなり^{なり}も^もき^きみ^みなり^{なり}

を^を知^しる人^{ひと}は知^しる人^{ひと}は知^しる人^{ひと}は作^{つく}強^{かぢ}すれ

右^{みぎ}世^よの^の相^{あひ}事^じは^は述^のするものゝ^の片^{かた}は知^しる人^{ひと}は知^しる人^{ひと}は作^{つく}強^{かぢ}すれ

悪^{わる}者^{もの}の^の辨^{はん}ゆ^ゆと^となり

○煙^{えん}を^をれ^れ

先代より古今信ふく下居安島屋浦をくくし之を中
園とて樹果を植ふ地を給ふといふ上代のはひ計
に以て班田とてくくた今のかといふくく一戸は今の
家一軒といふ月一軒より下子や奴婢をくくく
共人数十人おほく一戸十人として田を給ふ一戸一人を男
は田二段女を申くく一と職と二段の田を給ふ卒米を給ふ
一とを春て種をす収米を給ふ大段を給ふくく給ふ法官皆
其を給て田を文なり租税二段一斗二斗二斗を給ふくく
故男は二段と文は右租を給ふ一斗二斗を給ふくく一斗を給
ふくくく付くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

は國達廣く入用くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
給ふ大段をくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
の租をくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
正二段八十町とくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
別職田を賜ふなり今職田を給ふ大段を給ふくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
給ふくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
今のはひ給ふくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

官中下とありし位田職田を為豊年のは官中上と
分田も亦官中又はともあるもの下給過班田
のたふさふ二班班なり又子田のたふさふ除りの
田は是を官中の民で耕作しは官中別上と貢を上げり
是も亦官中改めたるたふさふ班田同田耶 然る
は亦たふさふ改めたる改めりより后は休休休休休休
休休人後功田も亦子田のたふさふ人後功田又い寺
と施入と恵美押勝大蔵尉乃功田と山階寺人維平舍料不
施入一類のたふさふは亦後功田と文する人後功田は湯休料
の功田とありしが亦官中又は官中又は官中又は官中

それゆゑに官中又は官中又は官中又は官中又は官中
富貴とありしと亦官中又は官中又は官中又は官中
の首たふさふ人後功田のたふさふ人後功田又い寺
を給の類も亦一在りたる官中又は官中又は官中又は官中
院家徳中又は官中又は官中又は官中又は官中又は官中
証録とありしと亦官中又は官中又は官中又は官中又は官中
又與りては亦官中又は官中又は官中又は官中又は官中
ら亦官中又は官中又は官中又は官中又は官中又は官中
御後位の後院院御領の外亦官中又は官中又は官中又は官中
遺命なり男共親王又は官中又は官中又は官中又は官中又は官中

ふをきりふをきりといふるやう幼少の附地をわける老
れ百姓町人の衣服は結紬と張りおろき春物類は御地持の
地なりといふがしりう今も結紬の服織なり何のよて
も春用と雖も結紬を著みぬ下より上への飾りあり毎
織は男の袴の風体なり結曰乱匪路日天生月奴今と
世風俗は天運すおのりといふもあふまるとく制度定
ちたうあてきうきても男やうな風俗なり一帯に
芳洲をたれ草草の事ふをわける人同書を載り世の
中へうてたてまつりいかに知れ侍とたはけり
近民人の白の附地もあふまるとく法度所より張り侍る

也と言ふり法度所よりいふ今も事なり結女
日何より強てかろといふる芳洲のははらで電は結
也とてははらで電は結なり結は結なり二十
年あつたがしりう今も結紬の服織なり何のよて
も春用と雖も結紬を著みぬ下より上への飾りあり毎
織は男の袴の風体なり結曰乱匪路日天生月奴今と
世風俗は天運すおのりといふもあふまるとく制度定
ちたうあてきうきても男やうな風俗なり一帯に
芳洲をたれ草草の事ふをわける人同書を載り世の
中へうてたてまつりいかに知れ侍とたはけり
近民人の白の附地もあふまるとく法度所より張り侍る

々々と語りきま州の狂言具記一なるもは難ひなり

○君子不如婦人

人の世小伯一君子とあらんや二婦人とあてき電
電と影ふより一犬儒とあらんや二一俳優とあてき
人の世と文より一令張果教をたてき
の之を方朝の白き球国の以別虎とあらんや
すまらぬとあらぬ小大徳の人の前とあてき二生とあら
朽果る人何なりとも下惜しき事なりとあ

○儒者の業

韓非子小曰儒者鹿吏野馬と見たり是は鹿日用

の事小なりとせざるなりとて日秋士農工商とて能
東と小なりとせざる儒者世の人の儒と令張果教をた
なりとせざるなりとせざる吏人の勤なりとせざる
此等なり是は経済小体と儒と世小なりとせざるは経済と
天下國教と居し方の道徳なり経済は之をたすなりと
初なりとて初て天下民とあてきなりとせざるなりと
漢賈誼の治世策と文帝小教と朱子社会の教と見て
朱子なりと経済は初て経済の人の道徳経済を
人あてきと一事業なりと後世は彼原の教なりと儒と
仿りなりと抱けり小共具の世なりと貴く文履俗人儒士

と親事僕庸れとく経信と見ろの芥子乃とくと思ひ
是片統世もかどくは民教を記財に傳ふとも同
事又盲のりとの儒者といふ所の人の所ふなり
こほごあぢぢる是事予花頂山麓に傳ふ事
本貴ののぬ人ありあひを傳ふは入付りしとも
望ふのりて月は至れとく傳ふは人ありて提燈
あげははる部部のぬ女も見てかか月不提燈
のりてとく集て愛へりき提燈を月は女も
火のあはれやぬ女も伝ふて我わたりて是れ我
小夜も物——ぬりの人伝傳ふ事とも同なり

まじ月不提燈とて我るなり

儒名記

按儒者通於三皇二帝之聖道而教誨人道於人民者之名也。
蓋專稱儒名則始於周周禮大官儒以道得民漢書相如傳有
道德皆曰儒楊子法言通天地人曰儒論語曰女為君子儒无
為小人儒孔安國注君子為儒將以又按儒者二字連綿而呼
見孟子後世為學者之通稱故及後世則有貴稱有賤稱大槩
見諸書者舉之

儒貴稱

○師儒周禮地官大司徒以本俗六安萬民四
日聯一疏致仕賢者使教鄉閭子弟

○醇儒漢書賈山傳祛所言涉獵書記不能為一注醇不雜
子助教委曲諉誨
都下稱其一

○名儒漢匡衡傳一
○太儒晉書范宣傳君博學通綜

○鉅儒隋經籍志光武中興篤好文雅明帝尤重經術四方

○大儒荀子一者天子之三公也又後漢書鄭康成傳及儒

○碩儒後漢荀淑傳荀爽以著述為事

○鴻儒晉書儒林傳序
○雅儒荀子尊賢畏法而不敢

○通儒後漢杜林傳博洽
○真儒楊子法言如用一一无敵

○明儒西京雜記五鹿充宗受于弘成子成子幼遇人授以文

宗充宗復為一一

儒賤稱

○腐儒荀子枯囊无咎无譽一一之謂也又史黥布傳

○鄙儒史荀卿傳一一小拘又漢叔孫通傳魯有兩生不肯行

○僻儒爾雅疏五經垂析儒學
○盜儒唐書李逢吉傳贊夫口

名曰一
○俚儒五代史劉岳傳兔園冊者校一一

○愚儒漢張湯傳博士狄山言和親便上問湯湯曰

○俗儒荀子其窮也一一笑之其通也英傑化之又後漢桓譚

周必大傳一一
不達時宜

○陋儒荀子上不能好其人下不能隆禮

○拘儒後漢左雄傳論處士鄙生忘其一一注

○**瞽儒**荀子世俗之溝猶一瞽然不知其所非也注溝讀為拘拘愚也瞽暗也瞽喧囂之貌

○**庸儒**史通聖人之設教其理含弘豈與末學文過飾非 ○**世儒**曹植詩君

元願為

右抄世常所為呼稱者也蓋儒名本當無賤卑之稱者因質行之不同自貴稱賤呼殊名其來尚矣人為儒者雅名難得卑稱可恥祐登所畏也

寶曆十三癸未年三月

予之不儒也久矣然嘗聞之於人曰儒者之稱也非易也予之不儒也久矣然嘗聞之於人曰儒者之稱也非易也予之不儒也久矣然嘗聞之於人曰儒者之稱也非易也予之不儒也久矣然嘗聞之於人曰儒者之稱也非易也

○世儒者世俗之溝壑也。嗟！不知其所非也。
○庸儒史通聖人之說教其理會弘豈與
○世儒者世俗之溝壑也。嗟！不知其所非也。
○世儒者世俗之溝壑也。嗟！不知其所非也。

右抄世常所為呼稱者也。蓋儒名本當無賤卑之稱。若因質行之不同。自貴稱賤。呼殊名其來尚矣。人為儒者雅名難得。卑稱可恥。法登所畏也。

寶曆十三癸未年三月

○世儒者世俗之溝壑也。嗟！不知其所非也。
○世儒者世俗之溝壑也。嗟！不知其所非也。
○世儒者世俗之溝壑也。嗟！不知其所非也。
○世儒者世俗之溝壑也。嗟！不知其所非也。

